

展示目録

※都合により展示の内容を一部変更することがあります。作品目録の番号は作品の並びと異なります。

番号	作品名	制作年	年齢	縦×横(cm)	号	技法・材質
1	自画像	1925(大正14)	20	30.5×22.0	3F	油彩・キャンバス
2	月夜の縞馬	1936(昭和11)	31	38.2×63.2	変12P	油彩・板に貼った厚紙
3	室内	1939(昭和14)	34	80.0×130.0	60M	油彩・キャンバス
4	室内	1930年代後半～40年代前半		60.0×90.9	30P	油彩・キャンバス
5	果物籠	1940年代		45.8×53.3	10F	油彩・キャンバス
6	アンダーソンの壺と小鳥	1951(昭和26)	46	90.9×72.7	30F	油彩・キャンバス
7	花	1950～60年代		53.0×45.5	10F	油彩・キャンバス
8	とうもろこしと魚	1963(昭和38)	58	80.0×116.5	50P	油彩・キャンバス
9	太陽	1964(昭和39)	59	90.9×72.7	30F	油彩・キャンバス
10	カーニュ風景	1969(昭和44)	64	90.9×72.7	30F	油彩・キャンバス
11	花(黄色)	1971(昭和46)	66	45.5×37.9	8F	油彩・キャンバス
12	ヴェネチアの橋	1971(昭和46)	66	92.0×73.0	30F	油彩・キャンバス
13	小運河の家(1)	1972(昭和47)	67	100.0×81.0	40F	油彩・キャンバス
14	霧	1973(昭和48)	68	80.3×65.1	25F	油彩・キャンバス
15	大運河にて	1973(昭和48)	68	60.6×73.0	20F	油彩・キャンバス
16	細い運河	1974(昭和49)	69	92.0×73.0	30F	油彩・キャンバス
17	ヴェネチアの海	1985(昭和60)	80	92.0×72.8	30F	油彩・キャンバス
18	僧院	1979(昭和54)	74	100.0×100.0	40S	油彩・キャンバス
19	モンマルトルの家	1987(昭和62)	82	91.2×72.5	30F	油彩・キャンバス
20	崖の上(アンダルシアの)	1987(昭和62)	82	73.0×92.0	30F	油彩・キャンバス
21	花(ヴェロンにて)	1988(昭和63)	83	55.0×46.0	10F	油彩・キャンバス
22	ブルゴーニュにて	1989(平成元)	84	81.0×100.0	40F	油彩・キャンバス
23	花	1989(平成元)	84	73.0×60.0	20F	油彩・キャンバス
24	さいたさいたさくらがさいた	1998(平成10)	93	130.0×160.0	100F	油彩・キャンバス
25	花(絶筆)	1999(平成11)	94	45.8×38.2	8F	油彩・キャンバス
26	自筆原稿「五月」原稿用紙2枚 ※花譜12ヶ月「ミセス」1992年5月号(文化出版局)掲載					
27	自筆原稿「華」原稿用紙2枚 ※『華』(1998年・求龍堂)掲載					

花をモチーフとした三岸節子の装丁書籍

『私の花物語』 壺井栄、1953年、筑摩書房

『俳句の作り方』 中村汀女、1953年、主婦之友社

『夜光の女』 芝木好子、1955年、河出書房

『近代恋愛詩』 亀井勝一郎、1955年、中央公論社

『罪かなし夏子』 舟橋聖一、1962年、新潮社

花とヴェネチア

三岸節子は画業の前半期においては、身近なものを題材に静物画や室内画を描き、西洋の近代絵画の影響を受けながらも独自の世界を繰り広げました。1964年、神奈川県大磯にアトリエを構えると周囲の自然や太陽を取り込んだ新たな作風へと展開し、さらに1968年には南フランスのカーニュに移り住んで風景画に取り組みました。しばしばイタリアの水の都ヴェネチアに旅して運河と石造りの街並みが織りなす風景を描き、1974年、パリと日本で「花とヴェネチア 三岸節子展」を開催して高い評価を得ました。これを機に引き続きフランスに滞在することを決意し、ブルゴーニュ地方のヴェロン村に農家を買収して改築すると、1989年に帰国するまで、ここを拠点にヨーロッパ各地の風景を題材に印象的な作品の数々を生み出しました。本展では、風景画の中でもとりわけ多彩な構図が見られるヴェネチアの風景画や花の作品を中心に、生涯の作品をご紹介します。

No.14 〈霧〉

1974年の個展「花とヴェネチア」に出品された作品です。グレーの微妙な色調の変化の中に、霧にかすんだヴェネチアの街と空、そして運河が描かれ、アーチ形の橋の赤茶色とゴンドラの黒い線がアクセントとなっています。霧に包まれたヴェネチアの街は、作者の目にいつも増して魅力的に映ったことでしょう。「不思議とこの水上からの角度が、水の上の街を見るのに最高の角度であることを発見した。観光シーズンでない冬、暇をもて余している船頭にはよい客だったであろう。あっちへ行け、こっちに行ってくれと、こちらの要求に応じてゆっくりと船を進ませてくれた。」^(※1)本作でも手前に船の舳先が描かれており、運河を進むゴンドラからの眺めであることが分かります。観光客も少なくなる冬の寒空の下、船に乗ってスケッチを重ね、カーニュのアトリエで試行錯誤を繰り返しながら風景から得た感動を油絵に込めていきました。



《霧》1973年 ©MIGISHI

No.15 〈大運河にて〉

ヴェネチアの街をS字に走るカナル・グランデ(大運河)沿いの石造りの建物の一部を切り取って描いた作品です。滑らかな乳白色で表された運河の流れと、扉や壁の重厚な塗り重ねの対比が印象的です。絵具を幾重にも塗り重ねたり引っかいたりして描くことで、壁に残されたヴェネチアの歴史を画面の中に刻み込んでいるようです。「日本にはこのような石や壁はありません。人間の歴史が、幾世紀もかけた時代の流れ、そのうつり変り、変質しない陰画のように焼きつけてきたかのような二つの鉱物質に、私は魅せられてしまったのです。私は繊細な魂だけが知覚できる、雰囲気発散、つまり眼に見えない生命を現わしてみたいのです。」^(※2)ヴェネチアの何百年にもわたる歴史がしみ込んだ石造りの壁は、西洋の文化や絵画の本質に迫ろうとする作者にとって格好のモチーフとなりました。

No.16 〈細い運河〉

水上からの眺めを捉えた作品です。やわらかな桃色の壁は奥に行くほど霞み、空気に溶け込んでいくようです。運河にサッと一筆入れられた青い線が、建物の中から水面に映りこんだ空を間接的に表現しています。水上からの視点は、運河と橋、両岸の建物、そして空が織りなす多彩な構図を作者にもたらし、ヨーロッパの風景画の中でもとくに優れた詩情豊かなヴェネチアの連作が生み出されました。本作は中でも、ゴンドラに乗って運河の両側に立ち並ぶ建物の間をゆっくりと進んでいるような感覚を、鑑賞者も共有できるような作品です。

花の作品

花は作者が生涯にわたって描いた題材です。当初は花や葉、茎の形が描き分けられていましたが、やがて鮮やかな花の部分のみが花瓶と組み合わせられて描かれるようになりました。花瓶にはしばしばギリシャ風の人物が描きこまれています。形が溶解した花の作品は、素朴な図柄の花びらとともに描かれることで美しい色彩がより豊かに表れ、ヨーロッパの古代文明の薫りも漂わせています。「私の描く花は、「何の花」という花ではない。それ故、尋ねられても返事ができない。私としては、花そのものを表現したい、花の命を描きたい。」^(※3)と語るように、作者にとって花を描くことは命を描くことでもありました。晩年の大作「さいたさいたさくらがさいた」(No.24)は例外的に花の名前が明らかであり、作者の特別な思いが満開の桜に込められています。

※1、3 『三岸節子ヨーロッパ デッサン集 1954-1989 旅へのいざない』(1997年、求龍堂)より

※2 「花とヴェネチア 三岸節子展」図録(1974年、日本橋三越)より